慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	樋籠村の協同研究
Sub Title	Forming of a group for the historical study on Hiro-mura
Author	高村, 象平
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1951
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.44, No.2 (1951. 2) ,p.81(1)- 89(9)
JaLC DOI	10.14991/001.19510201-0001
Abstract	
Notes	関東農村の史的研究(第一集) : 武蔵国葛飾郡樋籠村 = Historical studies on the villages in the Kanto District (part I) 論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19510201-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

樋籠村の協同研究

高村象平

―私達の協同研究――それは發企されてから今日までに既に二年に近い月日を經て來たものであるが――、その最初の研究成果を、ここに「關東農村の史的研究（第一集）」という形で印刷に附することになつた。これを機會に私は、との協同研究の由來について以下數言を連ねる。

經濟史プロパーの研究では勿論のこと、この頃流行の謂ゆる理論經濟史なるものの研究においてすらも、史論に事實の裏付けを缺いてはならぬこと敢えていうまでもない。その歴史事實も、既に紹介されたものの單なる蒸し返しであるよりは、原資料に直接接し我が眼を通して把え得たものである場合に――假令その資料檢討の結果は既に知られているところと變らなかつたとしても――、史實の持つ説得力は不動となる。こういつた考えはこの分野の研究に携わる誰もが一様に抱くところであるが、といつて直ちに實行の運びには至るとは限らない。求める史實を盛つたと豫想されるような原資料が身近かに在るとはきまつていないからである。本塾經濟學部に職を奉ずる私達も亦これを煩慮した。然るに私達の素望は早くも叶えられることになつた。野村兼太郎教授が多年に亙つて蒐集された尨大な量の原資料を利用する機會を私達に與えられたからである。ここに私達は、直接には德川時代社會の研究を、延いては我が國社會構成の特殊性の檢討を、かねての宿望通り實證的に進めて行くことが出來るようになつたのである。私達後進の徒に對して大きな援助の手を差しのべられた野村教授の厚情に對して、私達は深謝の二字以外に呈すべきものを

理想の保険

インシュアランス ダイジェスト

生命保險の普及程度はその國の文化のバロメーターといわれます　戰前第３位を誇つた吾國の保險契約高も戰後は第１１位に落ちています

(國名)	(人口)	(契約高)	(國民一人当契約高)
1．米　国	1億4千万人	687.960億円	490千円
2．加奈陀	1千2百万人	38.840億円	316千円
3．英　國	4千7百万人	64.800億円	135千円
4．瑞　西	4百万人	5.641億円	129千円
5．濠　洲	7百万人	9.640億円	129千円
6．瑞　典	6百万人	7.542億円	112千円
7．デンマーク	4百万人	3.708億円	90千円
8．和　蘭	9百万人	8.193億円	85千円
9．諾　威	3百万人	2.440億円	78千円
10．佛　國	4千万人	6.311億円	15千円
11．日　本	8千万人	3.063億円	3千円

先進國ほど國民一人当りの保險契約高が高いようです　文化日本も先づ生命保險に対する再認識から

千代田生命

知らない。

昭和二十四年一月のことである。野村教授の御宅で私と小池基之教授とは先づ私達が着手すべき資料の選定に當つた。明らさまに述べれば、選定の第一條件は初學者向きであることであつた。書體が比較的綺麗であることが、原資料の操作に慣れる上にも、研究時間を十分に利用する上にも必要な條件であつた。且つその資料の內容も各種に亙つていて德川期の或る村落の全貌を知る上に萬遍なく揃つたものであることが望ましい。これ等は一見容易であつて實際は極めて困難な條件である。いくつかの村の名前が私達の前に現われそして消えて行つた。そして最後に殘つたのが武藏國葛飾郡樋籠村である。この村の資料ならば右の第一條件を比較的充すものと考えられ、その數量からしても尻込みするようなものではあるまい。加うるにこの村は大消費都市江戸に近くに位置することからして、或は農村への貨幣・商品經濟の侵入過程も明らかにされるかもしれない。これが村方資料について實證的な個別研究を進めようと意圖した私達の協同作業において、樋籠村が先づ選ばれた事情であつた。最初のことであるから毎週一回集つて協同研究をしても、この樋籠村についての研究成果が一應纏るまでには一カ年はかかるであろう。何も拙速の途を擇ぶ要はない。その一カ年の間には研究協力者の間から第二に着手すべき村の選定について色々な要望も出て來ることであろう。それ等を斟酌して、樋籠村の研究が終つた時に、次に研究する村を選定することにしよう。

こうして樋籠村の協同研究は始まつた。參加者は、小池基之、伊東俊吉、島崎隆夫、白石孝、宇治順一郎、宇尾野久、金丸平八、黑川俊雄、新保博、松尾謙介、それに私の十一名、後に服部謙太郎、中村勝己、渡邊國廣、片岡一郎の四名が加わつた。仲々の大世帶である。研究日時は原則として毎週木曜日の午前十時から午後八時まで。研究對象はこの樋籠村で永らく名主を勤めた田中家から出た文書。その總數二、〇〇〇點。內容を一言すれば、公文書としては、村明細帳（文政十三年、天保九年、明治二年、各一冊）、檢地帳（寛永一四年、元祿一〇年）、宗門人別帳（文政四年より明治十年まで一二冊）、年貢割付（明和元年より慶應二年まで九二通）、同皆濟目錄（寛政三年より慶應二年まで六〇通）、私文書としては、田中家がとつた質地證文（二八三通）、借金證文（一五六通）、小作未進證文（一三九通）、地守關係證文（一七〇通）、小作關係證文（九四通）、治水關係文書（五一通）、助郷關係文書（二七通）、その他である。尙、後になつて村入用帳（寛政三年から明治元年、四二冊）が田中家文書としてこれに加えられることになつた。先づ人別帳が研究協力者にあてがわれ、各家の年々の戶籍が作成される。その集計によつて幕末期における樋籠村の人口構成と動態とが明らかとなる。次いで十二の大函に收められた前記諸資料のカード作成。カードに要項を記入するために當該文書を一々閱讀して行く。讀みかねて遂に御多忙な野村教授を煩わしその示敎に俟たざるを得ないことも再三にとどまらなかつた。これは迂遠な方法であつたかもしれないが、然し初めて德川期の村方諸資料を操作する者も尠なくなかつた事情の下では、資料の性質を辨える上において却つて有效な途であつたと、私は考えている。

嘗ての樋籠村、現在の埼玉縣北葛飾郡幸松村にも現地調査と資料採訪とを兼ねて數回赴むいた。田中家の當主田中饒一氏、分家の田中章四郎氏が共に塾員であつたことも奇緣というべく、それだけに私達の資料採訪には思わざる多大の便宜が與えられた。幸松村村長山口音五郎氏はじめ同村吏員の方々にも一方ならぬ御厄介になつたし、私達の請を容れて同村坂卷家が多くの新資料を提示されその利用を快諾されたことも、私達にとつて忘れ得ぬ喜びである。文部省からは科學研究費が交付された。これ亦私達の協同研究の進捗に資するところ多かつたと言を俟たない。

かようにして諸方面からの援助を得て、私達の樋籠村協同研究は惠まれた環境の下に進められたということが出來る。然し愈々研究の結果を纏める段階に至つて、この種の研究に共通な支障が私達の場合にも存することを感得せざるを

得なかつた。それは資料そのものが研究の上に課す制約である。前述の如く樋籠村に關する原資料の數量は決して尠なしとしないが、それにも拘わらず、これ等資料の全體に通ずる性質の上から私達の研究の進展を限定するものがあることが次第に明らかになつて行つたのである。その制限は略々三つ。第一は、私達の利用する資料の大部分が私文書であるために生じたものである。即ち公的なものが少ないために、この村全體の發展事情を窺うことが頗る困難になる。また私文書も田中家關係のそれであるが故に、他の家については殆んど知ることが出來ない。しかもとのことがまた逆の效果として、田中家中心の研究にも幾多の困難を與えることになつて行く。第二は、資料の殆んどすべてが元祿期以降のものであることに發する制約である。これは前者の事情よりも一層大きな影響を私達の研究に及ぼした。即ち樋籠村及びその周邊の主穀水田地帶に田中家という大地主が成立し發展して行つた根據を、資料に基づいて解明することが出來ない點がこれである。第三に、資料には生産に關するものが缺けている。このために私達は農業生産の問題について數多くの疑問を抱いたが、常に滿足するに足る解答は得られずにいなければならなかつた。世に資料の存在量は甚だ多い。然し研究者の求めるような事項を盛つた資料は意外にも尠ない。私達も亦一樣にこの思を抱いたこと屢々であつた。

このような資料的制約はあつても、然し私達は一應なりとも結論を出して行かねばならない。樋籠村に大地主＝田中家が發生し成長して行つた過程、その基礎は何に在つたのか、それは如何なる性格のものであつたか、等々の問題について、私達は與えられた原資料を通じて能う限りの解答を下すよう努めねばならなかつた。研究協力者の間にはそれまでに、治水關係、小作關係、地守關係、金融關係、助郷關係等の擔當別が自づと形成されていたが、その各パート内における檢討、更に全員の協同討議を數回經た後、數名の手によつて研究成果が起稿されることになつた。偶々私達の協同研究は社會經濟史學會東京部會において報告する機會を得、發表の席上で加えられた質疑や批判についても考慮を拂つて、原稿は作り上げられた。本誌に掲げる三篇がそれである。この外に宇尾野久君は借用證文や名主の手控帳に基づいて「樋籠村における金融關係」と題する一文を草されたが、私の責任において今回は發表することを見合せた。いうまでもなく、この村を中心とした金融關係は、當時の南關東農村金融網、更に全農村構造の有機的諸關係の内部で把えられて、始めてその性格や本質が明らかにされるのであり、その段階にまで私達は未だ到達していないと判斷したからである。例えば天保・文久度における八通累計一八〇〇兩の田中又兵衞の借金證文の存在は、それまで文書の上では殆んど全く貸主となつていた同家の家運を卜するものであつたということも出來ようが、天保度の貸主として現われる加納佐一郎が粕壁とか關宿とかの宿場での金融業者であつたか否かについては尙後考に俟たねばならず、それは樋籠村周邊の諸村落の研究に附隨して究明さるべきものであろう。尙襄に一言したように、田中家文書の村入用帳はおくれて私達の利用し得るようになつたという事情から、この資料の檢討は未だ十分なものとはいえない。これに記載された夥しい助郷關係出費を考究することによつて、私達は樋籠村の助郷關係について別稿を發表する折もあろうと思うが、いまは右の當村における金融關係の研究と共に他の機會に讓ることとした。

顧りみれば二年に亟んとする歲月を費して公表する私達の研究成果が後掲の三篇であるということは、甚だ氣恥しい。ここに到つては今更辯解の辭も不要であろうが、私達にとつて協同研究の手始めであつただけに要らざることにも意外の時間をかけたことがかなり多かつた。然しそれ等の體驗は、この樋籠村の研究に引續いて行なわれる他の關東諸農村の研究に際して生きて來るに相違ない。否、それ等は生かさねばならない。私達はいま第二の協同研究對象として、一は利根川沿いの武藏國埼玉郡麥倉村を選び、他にはこれと違つた結果を豫想して下野國都賀郡上泉村を採

つている。前者の資料のカード整理は着々進められており、その位置した現在の埼玉縣北埼玉郡利島村には既に私達は現地調査に出掛けた。後者の栃木縣下都賀郡中村にも、資料整理が終り次第、赴むく豫定である。この兩村の外に、上總國市原郡不入斗村、武藏國豐島郡角筈村、武藏國足立郡染谷村の資料も漸次本塾經濟學部研究室に搬入されつつある。とうなると謂ゆる日暮れて途遠しの感も湧くが、然し事實においては私達はまだ日が出たか出ないかといつたところにあるわけであつて、それだけ研究成果を陸續發表したい強い意欲に驅られている。

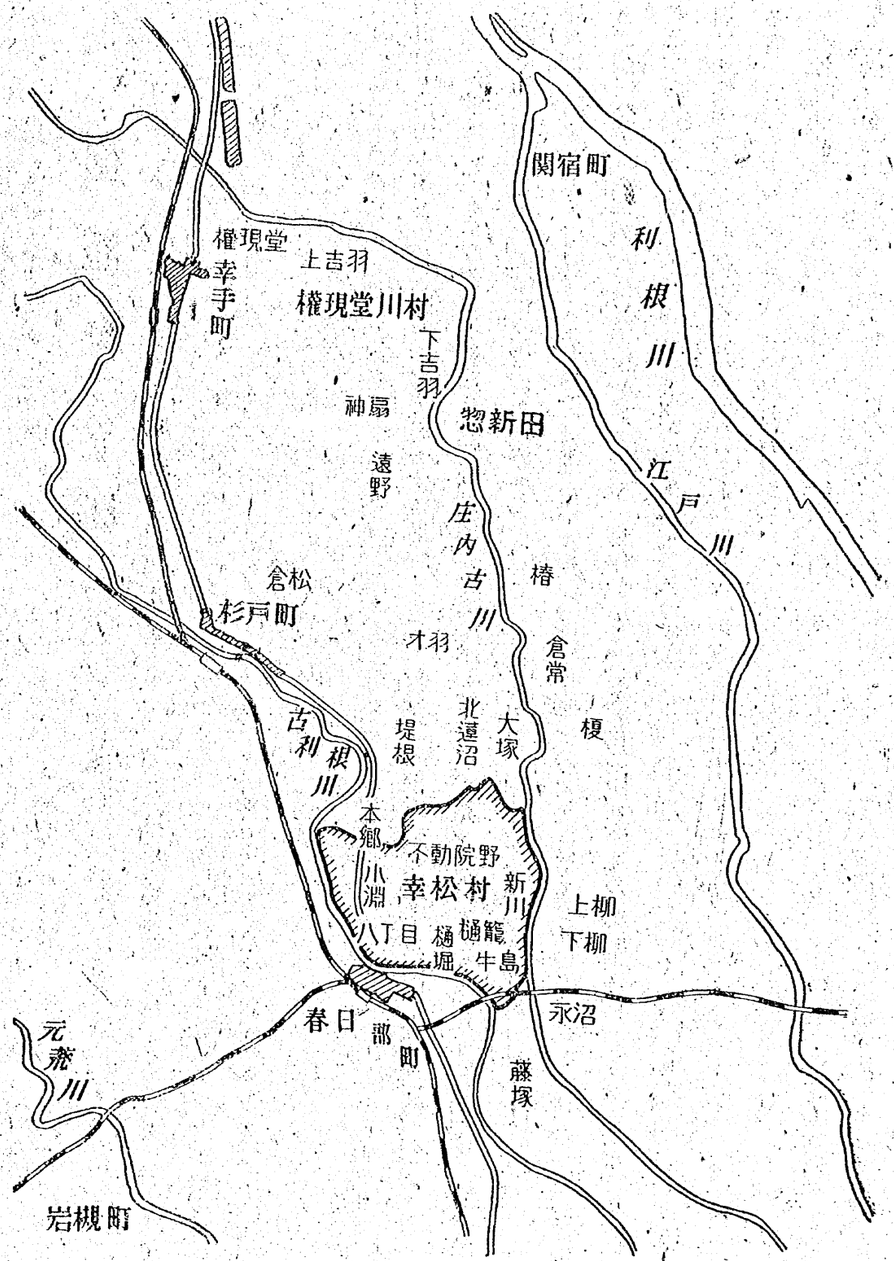
今回私達が發表する成果は、見られるが如く農業關係の問題の展開に終始している。經濟史は端的にいつて、我が國においても亦外國のそれも、農業史に外ならない。商工業が中心問題となつて登場して來るのは資本主義成立と共にである。從つて江戸時代の樋籠村の研究が農業史となり化すことは何等異としない。然し農業が研究の中核となるからといつて、當今流行の土地所有關係、貢租關係、そして農民層の分解過程の檢討を以て足るとすることには慊らぬものがある。それはこれ等の吟味が不要であるというのでは毛頭ない。もつと視野を廣くすることが必要であるという意味である。例えば農村における交易關係即ち商業・金融關係にも私達は十分留意せねばならない。そうでないと、折角資料に揭げられている交易關係の記述も土地制度や農民層の分解にのみ氣をとられているが故に、これを看過して不問に附してしまう惧れなしとしない。一旦見逃してしまつたならば、後になつて氣付いてもそれを檢索することは仲々容易ではない。且つそれは極めて無用な精力の浪費である。

嘗て領主の胃の腑が農民からの搾取の限界をなしたとして、自給するだけを目的とした自足的農業が中世農村經濟の本質であるといわれたこともあつた。然しその後の研究の進展はこの命題の非なることを明らかにしている。その證左の一は、聖俗領主の土地獲得が自給に必要な程度以上に及んだこと、即ち土地所有が利潤獲得のために冀求されていたことである。農村の主要生産物は早くから意外にも廣い範圍に亙る交易に附されていた。それは土地の所有者にも商人にも等しく多大の利益を齎らした。これは西歐中世の史實ではあるが、然しそれを單に彼地における事情として片附けてしまうことをせずに、我が國の封建時代の農村の研究に際しても、この種の研究成果は常に顧りみて行く餘裕がなければなるまい。暗黑時代ともいわれている程の西歐中世中期に莊園とその外部との間の交易が盛であつたと闡明された事實は、まして德川時代において或る農村とその外部との間の交易の存在を當然のことと做さしめるに足る。勿論これは想定に止まるのであつて、それ以上に確言するには史實の裏付けがなければならない。が、その場合それを立證する史實が目前にあつても、若し前記の舊い通念が強く頭にこびりついている時には、その史實をつかむことなくして終つてしまう。史實は決して私達に語りかけはしない。默している。それを生かすのは研究者の抱懷する素養である。私達は協同研究そのものは德川時代關東農村の史的考察に置かれても、然し一局部に蹴躓することなく、視野を廣くすることに十分に戒意したい。ただこのような心構えにも拘わらず、この樋籠村の研究においては交易關係に觸れたものを發表することが出來なかつた。言行不一致の感があろうが、然しこれは、一にはこの側面の檢討が尙不十分であること、二にはこれに關する研究は當村のみならず少なくとも周邊の諸村の事情をも併せてこれを明らかにすることが必要であることに出でるのであつて、他意はない。

この他方において後揭の諸論稿に接せられた讀者が、江戸時代の樋籠村は自給生産的色彩が極めて濃い村であるとの印象を得られたならば、それも亦興味ある結論となろう。即ちそれは江戸という大消費地の近傍に却つて自給自足的村落が存在したという認識である。開けた地帶の中における謂わばエアポケット的な存在である。これ亦一般にいい得るところと私は考えている。江戸が極めて巨大な消費都市であつた。それだけにその周邊には却つて意外にも開

けない地點が散在した。若し江戸があれほどの大消費市場でなかつたならば、その一帶はもつと平均した程度の開け方をしたかもしれない。これも一つの想定であるけれど、西歐の史實にはこの傍證となるものがある。都市生活が發達した歐羅巴大陸各地におけるよりも、比較的小さな都市が澤山存在した英蘭の方が、市場の發達の農村に及ぼした影響は遙かに著しかつたということこれである。元より單なる想定は私達のとらぬところであるけれど、樋籠村についていえば、同村の農產物を外部に賣却したという事例には乏しいが、然し利根川その他同村を取捲く河川を利用した交通網の存在は、私達の留意して然るべきものである。その反面、金融關係を通じての對外交渉には瞠目するに足るものがあつたといい得る資料が、私達の眼を逃れて存在するかの感を私は抱いている。

先般、地方史研究協議會が結成された。同會は全國各地の地方史研究者・研究團體相互間の連絡を密接にし、我が國の歷史研究の基礎たるべき地方史研究を推進することを目的とする。この趣旨に賛同して、私達は個人としてまた研究團體としてこれに參加した。聞くところによれば、同會の會員は既に三百名を越したという。こういつた研究者相互の連絡が緊密になつて行くならば、以上に述べた私達の覦心も意外なところから充されることになるかもしれない。若しもそういうことになつたら、地方史研究協議會設立の意義も滿されるわけである。私達は何も彼も私達だけの手で達成しようとか、優れた成果を獨占しようなどとは夢にも考えていない。私達の愛するこの國土の史的研究が一歩づつでも深められまた廣められて行けばそれでよいのであつて、誰が鴻業完成の任に當ろうとそれは問題とするところでない。歷史の研究は謂わば下積みの仕事である。それ以上に出でようなどと大それたことは私達の誰もが志向してはいない。こういつた氣持で結びつけられた私達の協同研究、その第一回の成果の發表に對して、嚴正な批判をいただくことが出來たならば望外の幸せである。



樋籠村周邊の圖